

騎馬武者のいでたち

そもそも相馬野馬追に出陣する騎馬武者たちはどんな姿をしているのでしょうか？
基本のいでたちと野馬追独自の進化をみてみましょう。



さんじゃくがわ
三尺革
面懸が外れないよう補強するもの

うけづつ
受筒
旗などを差し込むため、甲冑の背面につけられた筒

おもがひ
面懸
轡を固定するため馬の頭にかける緒

うわおび
上帯
野馬追に使う旗は大きいので、受筒も一緒に体に縛る。この着付けは野馬追ならではの

しりがい
尻懸
馬のしっぽの下を巡らせて、鞍と馬の身体を固定するための緒

おぶくろ
尾袋
馬のしっぽをつつむ袋。明治時代以降、野馬追が神社の祭礼になって以降付けられたもので、祭礼に参加する馬(飾り馬)の装飾として付けられたと考えられる

あおり
障泥
馬が蹴り上げる泥で衣服を汚すのを防ぐため・鏝で馬腹を傷つけないための馬具

くつわ
轡
馬を操るため口に噛ませる道具

たづな
手綱
馬を操るための綱

むながい
胸懸
馬の胸部を巡らせて、鞍と馬の身体を固定するための緒

あぶみ
鐙
馬に乗るときの足掛かりにするもの

旗とそのデザインのあれこれ

祭場地を彩る旗たち。主張しつつも、美しい統一感を見ると、デザインにもさぞ厳しい決まりがあるように思われます。命がけの想いが落とし込まれたデザインや、意外と自由だった形やアレンジを、本誌デザイナーがデザインの視点も交えて考えます。

旗の大きさが大体定義されたのは昭和53年以降。現在も絶対的な決まりではなく、基本となる大きさという緩やかな定義。

はたちょう
旗帳(写し)



「英雄御旗帳」慶應2年(1866)鈴木敏徳氏所蔵



3尺(約91cm)

4尺5寸(約136cm)

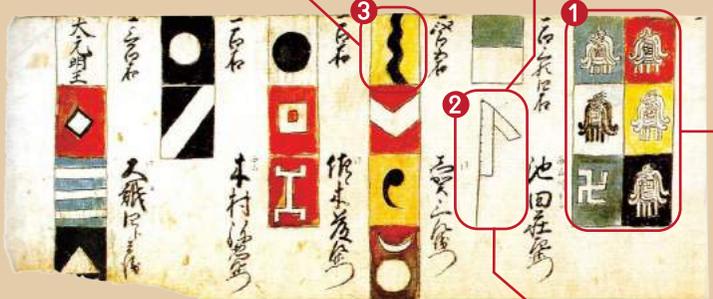
ち乳

旗と竿(竹)をつなぐ。素材は革で数は13のことが多い。旗との縫い込みに「☆」や「叶」「九字護身法」などの願掛けのマークになっている。

designers eye
なぜこのモチーフ?と不思議に思う旗も縁起を担いでいたり、願掛けだったりします。「強い動植物」「神様」「ことわざ」「昇るもの」等々、縁起物と言われるものはなんでも旗に取り入れる柔軟性がすごい!命がけの出陣での想いを込めつつオリジナリティは忘れない!「想いをカタチにして他者と差別化」それまさに“デザイン”!!

designers eye
独創的なフォルムの旗が結構あります。現在の野馬追ではほとんど見られませんが、先人の型破りな創造性に痺れます!実際に出陣していた様を見てみたいものです!

この波線のモチーフはなんと「山道」。『昇る』縁起物として、シンプルで汎用性が高い柄に昇華されているデザインに脱帽!!



designers eye
1 現存する「写し」も描いた人の画力に再現度がかなり左右されているそう!写しに描かれているデザインとたまたま残る実物が違うことも多々あるとか....
2 そんな写しを眺めているとモチーフが複雑なものがないとも味のある「ゆる絵」風に見える、愛着がわいてきます。

05

04

南相馬市博物館学芸員

二上文彦さんに聞く

旗の見どころ、知りどころ

色やデザインだけを見て目も引く旗ですが、その意味や背景も知れば野馬追もより楽しめるはず。野馬追に関する展示もたくさんある南相馬市博物館の学芸員・二上文彦さんに旗についての基礎知識を聞きました。

AQ そもそも旗は何のためにあるんですか？

旗は名札みたいなもので、野馬追に出るすべての家で違う旗印を持っています。騎馬武者がたくさん集まると一人ひとりの顔は見えないので区別がつくようにしたのです。江戸時代までは、武士が殿様から旗印をいただいたり、自分でデザインしたりしたものを各家で使い、誰がどんな旗を使うのかを山城で管理している旗帳に記載していました。明治時代以降は、武士ではない人が野馬追に出る場合は、武士の家から譲ってもらったり、新しく作ったりした旗を使いました。

AQ どのくらいの種類があるのでしょうか？

現存する旗帳の写しによると江戸時代の終わりには2400〜2600くらいの図案がありました。現在出場しているのは400騎くらいなので、使われていない旗の図案が2000はあることになりそうです。もったいない感じもしますよね。博物館も今は使われていない旗を所蔵していますが、今見ても新鮮な図案がたくさんあるんですよ。

AQ 特徴的な旗にはどんなものがありますか？

今は大きさが決まっていますが、昔は自由度が高かったようで、旗帳にはいろいろな形の旗が記録されています。丸い旗やアシンメトリーのもの、またいろいろなものもありました。

AQ 野馬追において、旗の存在は大きいのですか？

とても象徴的なものだと思います。かつては野馬追のことを「旗祭り」という人もいたようです。神旗争奪戦で一堂に旗が集合している様子は壮観だし、甲冑競馬は旗を背負っているからこそ迫力がある音がある。旗があることで野馬追が華やかな祭りになっているともいえます。野馬追が近づくと、玄関先に旗を出して飾っている家を見かけます。旗が、野馬追と結びついた大切な印であり証であることを実感する景色です。



二上文彦
ふたかみ・ふみひこ
南相馬市博物館 学芸員

学芸員として相馬地方の歴史を研究するかわら、相馬野馬追保存専門委員として、野馬追の保存・伝承の指導にも携わる。